オガグワの森
ハンドブック

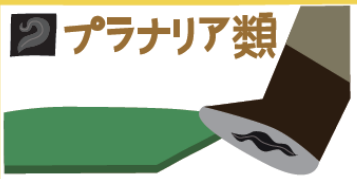
令和４年度　小笠原村

オガグワの森プロジェクトって？

【取組の背景】

- 多くの**固有生物**とそれらが織りなす特異な生態系
- 生物進化は現在も**進行中**
- それらが評価されて小笠原は**世界自然遺産に登録**
- **外来生物の侵入**などの環境変化に耐えられず数を減らす在来生物
- そんな生き物たちが再び安心して暮らせるような対策を進行中
- **外来種対策**などの取組に対し、物理的・心理的に距離を感じる村民も
- 村の基本理念「**人と自然の共生**する村づくり」のもと、来年は**返還50周年**
- 上記を契機に小笠原の**自然を身近**に感じられる場と機会を創出

プラナリア類



プラナリア類が靴底に付着して侵入するのを防ぐため、船に乗る前や降りる時に海水マットで靴底を洗うように呼びかけています。

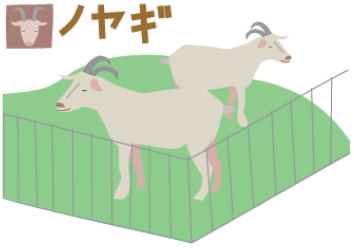
外来のアリ類

ノミガイなどの在来の陸産貝類を食べるとされているツヤオオズアリの拡散を防止するため、殺虫剤による駆除が母島で進められています。

クマネズミ

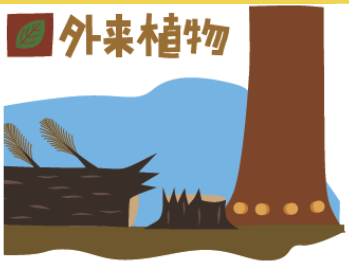
兄島などの無人島を中心に、カゴわなや薬剤による駆除が進められています。

ノヤギ



ノヤギが、唯一生息している父島において、東平への侵入を防止する柵や銃器による排除が進められています。

外来植物

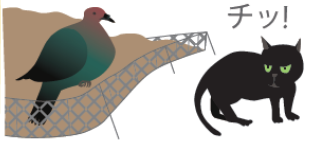


モクマオウやアカギ、ギンネムなどの在来植生を侵略する外来植物の伐採や薬剤による駆除が進められています。

グリーンアノール

アノールが無人島へ渡ることがないよう、港周辺でトラップによる捕獲が行われています。侵入が確認された兄島では重点的な対策が行われています。

ノネコ



ネコの侵入を防止する柵やカゴわなによる排除が父島、母島で行われています。捕まったネコは人と暮らせるよう訓練した後、新しい飼い主に引き渡されます。

外来種対策

【取組の概要】

- 小笠原固有の樹木「**オガサワラグワ**（通称オガグワ）」をシンボルとした森づくり
- 平成28年度から現況調査、残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定・整備を実施
- 平成30年度には、小笠原の**返還50周年**を記念して、林野庁と森林総合研究所から提供を受けた父島由来のオガグワの苗を**植栽**
- その他、生き物観察、地図づくり、植樹、レク利用などのイベントを年2回程度開催
- 現在は、在来樹木と外来樹木が混成する二次林だが、オガサワラグワの維持管理と森づくりを進め、ゆっくりと**在来の森へ転換**

オガグワの森のこと

- 父島字長谷の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約１haの村有地
- かつては農地利用
- ヒメツバキ・モクタチバナなどの在来樹とアカギ・キバンジロウなどの外来樹が混成した二次林
- 一部に良好なマルハチ・メヘゴ群落

沢（ヨシノボリ、カワニナ、エビ類、アメンボ類など）

ヒメツバキ−キバンジロウ群落（モクタチバナ、ビロウ、シマモクセイなど）

マルハチ−メヘゴ群落

シマホルトノキ個体群

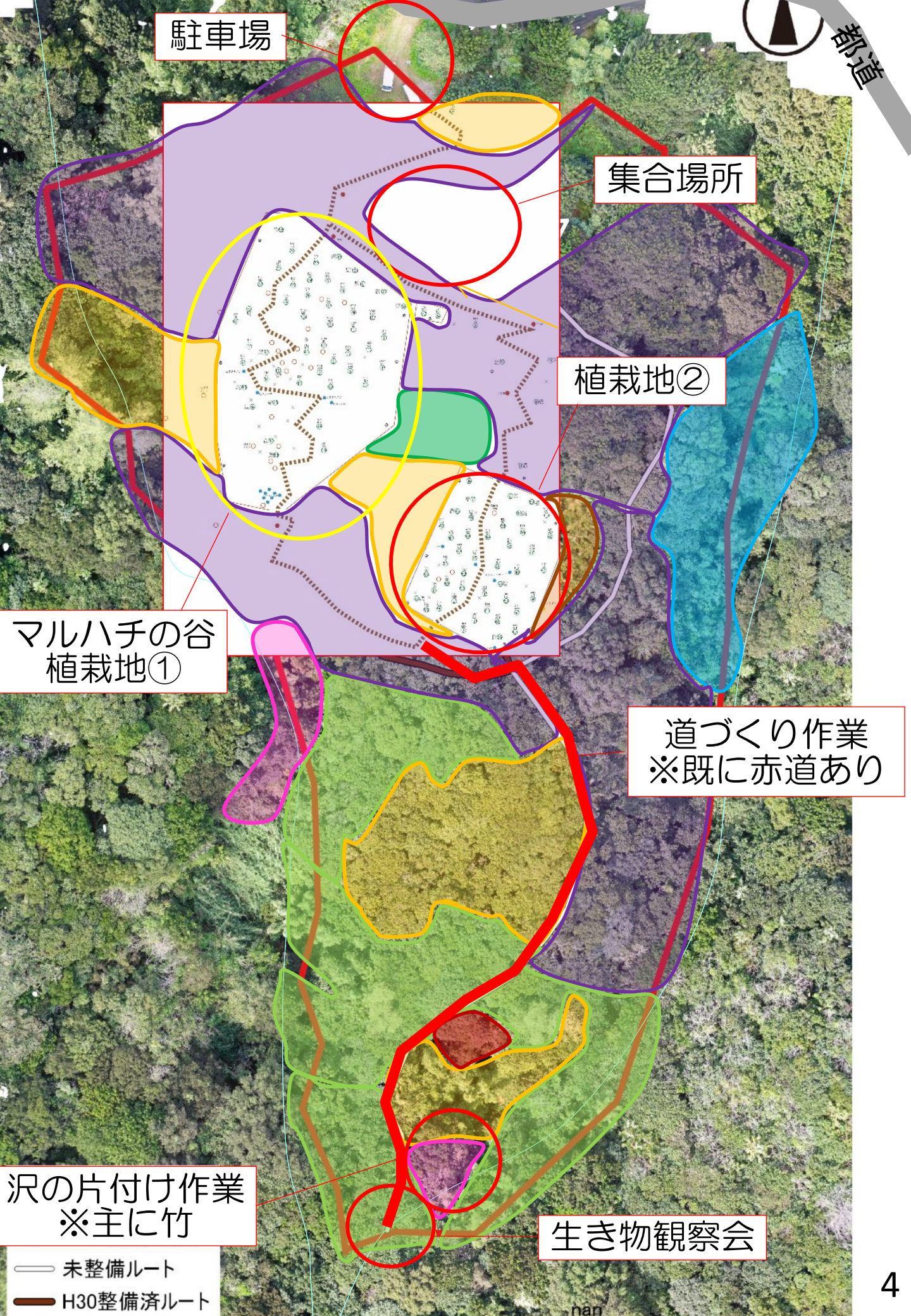
アカギ優占群落（ヒメツバキ、モクタチバナ、マンゴーなど）

キバンジロウ優占群落

アレカヤシ個体群

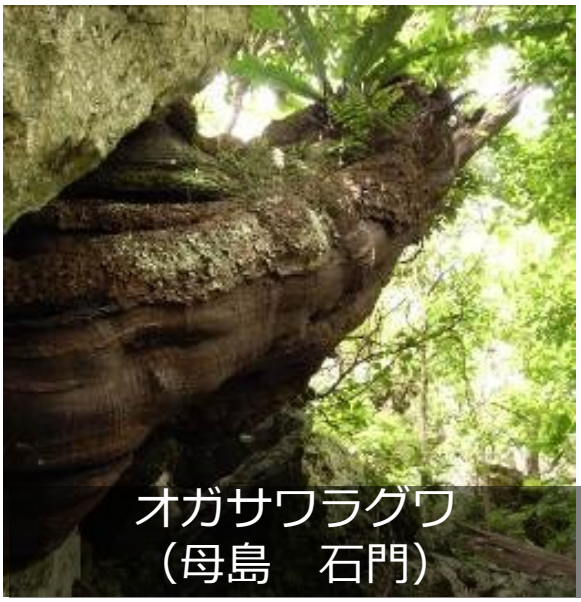
インドチク個体群

モクマオウ大径木


駐車場
都道
集合場所
植栽地②
マルハチの谷
植栽地①
道づくり作業
※既に赤道あり
沢の片付け作業
※主に竹
生き物観察会
未整備ルート
H30整備済ルート

そもそも“オガグワ”ってどんな木？

- 正式名称：オガサワラグワ
- 小笠原諸島のみに分布するクワ科の落葉高木
- 高さ15m、幹の直径1m以上の大木になるものも
- かつては湿性高木林の代表的な樹木
- 現在は弟島、父島、母島の限られた地域に生育


オガサワラグワ
（母島　石門）

平成28年10月14日　植樹

水生生物 編

- 長谷ダムの上流域にある沢は傾斜が急であるため、降水はすぐに流れ、渇水となりやすい
- 亜熱帯の沢であるため、源流部に近いにもかかわらず水温は高く、落ち葉等の分解が早いため、有機物が多く含まれる
- 人為的影響による水質汚染・水質汚濁はほぼないと考えられ、固有種の存在も確認されるなど自然度は高い

写真提供・解説　新行内博　佐々木哲朗　尾山匠

オガサワラ クロベンケイガニ

- 多くは集落近辺の河口近くの土の壁に巣穴を生息
- この森のように標高が高いところにも生息
- 近づくと白いハサミで威嚇するポーズをとる

トゲナシ ヌマエビ

- 小笠原の河川に広く、多く分布
- 中央に白い線が入るものなど模様と色は様々
- 額角（目の間から前に出た角）が短く、そこにトゲがないのが特徴

ヤマト ヌマエビ

- 小笠原の河川に広く分布
- 上から見ると、尾が青い
- 体側には赤い斑点が目立つものが多い

オガサワラヨシノボリ

- 淡水魚で唯一の固有種
- 目の下から口にかけて赤い線がある
- 稚魚は海に降り、成長して再び川に遡上する

オガサワラヌマエビ

- ヌマエビの中でも淡水で産卵・ふ化する陸封型となった種
- 卵は他のヌマエビに比べて大きい
- 茶と青の色のタイプがある
- 小笠原でも生息する川は限られている。

ヒラテナガエビ

- オスは体もハサミも大きくなり、全長20cmにもなる
- 肉食で、他のエビも食べてしまう

オガサワラコツブムシ

- 湧水や源流域に生息する“泳ぐダンゴムシ”
- 父島と母島のみ生息と知られており、父島では長谷川のみで確認されている

ヒラマキガイの一種

- 小笠原固有種と思われる淡水巻貝の未記載種（学名が与えられていない新種）
- 近縁の種はなんとチベットの奥地に生息
- どうやって小笠原にやってきたのかは“謎”

サカマキガイ

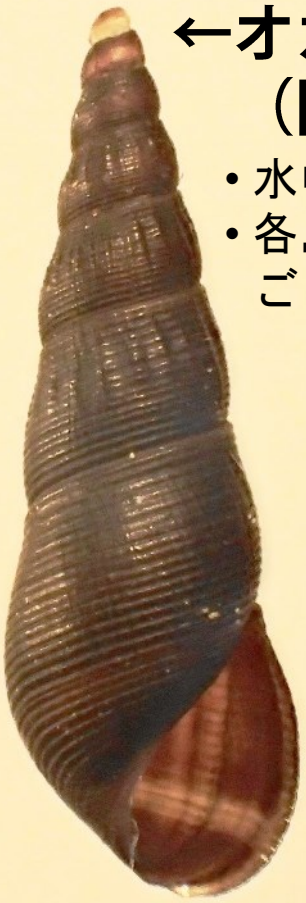
- 水草や観賞魚にまぎれて定着した外来の巻貝
- 貝殻は半透明で内蔵の模様が透けて見えて美しい
- 多くの巻貝は右巻きのだがこの貝は左巻きなので逆巻貝と命名された

長谷のオガサワラニンギョウトビケラ

古銅輝石
（特徴：薄い黄緑～薄い茶色透明、柱状）

その他の粒は、火山岩が変質し、土壌に変わっていく段階の岩片や鉱物

斜長石
（特徴：白～無色透明、柱状・板状・角ばった形）



←オガサワラカワニナ（固有種）

- 水中の落ち葉などを食べている
- 各島に広く分布し、殻の形は島ごとに少しずつ変化している

ヌノメカワニナ（外来種）→

- 10年ほど前に侵入報告
- 繁殖力が強く淡水・汽水に棲む
- 上記のカワニナと生息環境が似ており、オガサワラがヌノメに置き換わるという現象が起きている

ニホンオカトビムシ

- 川に暮らすヨコエビの仲間
- オガサワラカワニナなどと共に落葉を食べる分解者

オガサワラアメンボ

- 父島列島にのみ生息するアメンボ

ケシカタビロアメンボ

- 2㎜ほどしかない小さなアメンボ
- 脚は短いが立派に水面をすべるように移動する

植物 編

- 吹割山の南に位置し、標高140～190mの緩やかな南向きの斜面で、周辺の山々からの集水域
- 周辺含め、かつてはオガサワラグワやウドノキ、シマホルトノキなどの湿性高木林だったと考えられる
- 現在は、北側にアカギの大径木、南側にヒメツバキ・モクタチバナ、低木にキバンジロウが混交
- 沢沿いには木生シダの枯死したものがみられ、東側の沢上流はマルハチ・メヘゴが多数生育

写真提供・解説　日本森林技術協会

【森にもともといる植物】

マルハチ

ホソバリュウビンタイ

モクタチバナ

ヒメツバキ

ヒメフトモモ

ムニンセンニンソウ

【農業等により内地からやってきた植物】

アカギ

キバンジロウ

ガジュマル

アレカヤシ

インドチク

デリス